

宮沢賢治の童話における〈学校〉〈教員〉
—「鳥箱先生とフウねずみ」を中心に—

遠藤 純

武庫川女子大学 学校教育センター紀要

第6号 2021年

宮沢賢治の童話における〈学校〉〈教員〉

— 「鳥箱先生とフウねずみ」を中心に —

遠藤 純

一. はじめに

宮沢賢治の童話には、さまざまな形で〈学校〉や〈教室〉、〈先生〉が登場する。

童話の第一作とも言われる「蜘蛛となめくちと狸」は、醜い出世競争とその破綻を描いた物語だが、これを改稿した「寓話 洞熊学校を卒業した三人」では、〈学校〉という教育の場が具体的に設定され、そこに洞熊先生なる教師が登場する。

鼠の学校がある「[ツェ]ねずみ」、鳥の子に説教をしたことから〈ははあおれは先生なんだな〉⁽¹⁾と気づく「鳥箱先生とフウねずみ」、猫の子どもに鼠が教育を施す「クッねずみ」は、合わせて「鼠三部作」と言われるが、いずれも〈教育〉が何らかの形で関与する物語である。

「風 [の] 又三郎」では、村の学校に髪が赤く、見たことのない風貌の少年が現れ、子どもたちに畏怖を与えるが、それは誰もいない九月一日のまだ薄暗い早朝の〈教室〉であった。この物語は末尾も教室で終わり首尾一貫している。教室での〈午後の授業〉から始まるのが晩年の作品「銀河鉄道の夜」であり、狐学校の教室に行く（授業を参観する）のが「茨海小学校」である。狐の学校を描く作品には生前発表作品「雪渡り」もあり、これらの物語では、いずれも学校や教員、教室が描きこまれるとともに、作品の舞台として重要な要素となっている。

これは言うまでもなく、賢治自身が近代の学校教育を受け、教室で学んできたことと関係しているものと思われる。

加えて、宮沢賢治は二十代後半にあたる大正十年十二月から四年四ヶ月に渡って（二六～三〇歳まで）、稗貫（花巻）農学校の教師として教職生活を送った。賢治童話には、この教員生活を基にしたと考えられる作品が多くあり⁽²⁾、その意味において、教職が賢治にとっていかに大きなものであったかが確認できよう。かつ、直接的には後年〈私も農学校の四年間がいちばんやり甲斐のある時でした。但し終りのころわづかばかりの自分の才能に慢じてじつに虚傲な態度になってしまったこと悔いてももう及びません。しかもその頃はなほ私には生活の頂点でもあったのです〉⁽³⁾と教え子に書き送り、さらに詩「生徒諸君に寄せる」では次のように書いている。

この四ヶ年が／わたくしにどんなに楽しかったか／わたくしは毎日を／鳥のやうに教室でうたつてくらした／誓って云ふが／わたくしはこの仕事で／疲れをおぼえたことはない

このように、教職生活が賢治の人生にとって重要な節目、期間であったこと、それが創作に多大な影響を与えたことは言うまでもなく、賢治作品における〈学校〉〈教育〉というキーワードが頻出するのも至極当然のことと考えられる。

しかし、その一方で、〈学校〉〈教育〉の形象は一様ではない。

「風 [の] 又三郎」は山間部の小さな学校を舞台にした物語だが、方言で話す村の子どもたちとは対照的に、標準語を話す一見規範的な教員が登場する⁽⁴⁾。一つしかない教室で全学年を担当し、マンドリンを弾き、結末で赤いうちわを持って現れるこの先生は、どこか土着ではない、村落共同体とは異質な存在にも見える。同じく村では異質な存在である赤髪の少年、高田三郎がやってくる教室という場、そこを主戦場とする先生という点からすれば、この先生の尋常ではない、不可思議な存在感も

またクローズアップされてこよう。

他方、冒頭で取り上げた「寓話 洞熊学校を卒業した三人」の洞熊先生は、形式的に教育者であろうとするものの、勘定を間違えたりカンニングを見落したりと、生徒の教育には何ともいい加減である。三人（蜘蛛、なめくぢ、狸）が卒業した後は、どぶ鼠をつかまえて学校に入学させるために走り回っており、よりよき教育を追求する教師ではなく、教師という地位に固執する人物として描かれているようである。やがて三人がみんな死んでしまうと、〈あゝ三人とも賢いゝこどもらだったのにじつに残念なことをしたと云ひながら大きなあくびを〉する。生徒の死にあつても特になんとも思わないこうした教師像は、〈おれは先生なんだぞ。鳥箱先生といふんだぞ。お前を教育するんだぞ〉と高圧的に語り、四人の生徒が死んでも〈あゝ哀れなことだ〉としか言わない「鳥箱先生とフウねずみ」などにも通底する。〈これからの本当の勉強はねえ／テニスをしながら商売の先生から／義理で教はることでないんだ〉（「一〇八二 [あすこの田はねえ]」『春と修羅』第三集）とも書く賢治には、教員、特に職業教師への実に厳しい視線が感じられる。

学校や教師への視線で言えば、「雪渡り」はやや異質な作品といえるかもしれない。人間の四郎とかん子が子狐の紺三郎に出会い、十二歳以上は参加できないという狐小学校の幻燈会に招待される。紺三郎は四郎とかん子に対し、狐が人を化かすというのは無実の罪を着せられていたと述べ、末尾には狐学校の生徒に〈みなさん。今晚の幻燈はこれでおしまひです。今夜みなさんは深く心に留めなければならないことがあります。それは狐のこしらえたものを賢いすこしも酔はない人間のお子さんが喰べて下すつたといふ事です。そこでみなさんはこれからも、大人になつてもうそをつかず人をそねまらず私共狐の今迄の悪い評判をすっかり無くしてしまうだらうと思ひます〉と語りかける。狐の〈学校〉で教授される正直さ、イノセンスが強調される結末であり、先に見た「寓話 洞熊学校を卒業した三人」などの出世競争や欺瞞の世界、学校や教師へ厳しい視線があるのとは対照的である。

ちなみに、「雪渡り」は狐の学校を描いているが、登場するのは子狐だけで、先生らしき大人は一切出てこない。幻燈会を取り仕切るのは子狐の紺三郎であり、子狐の純粹さ、また学校における教育内容の真善美を強調するため、敢えて大人や教員を排除したようにもみえる。そのように考えると、賢治には学校や教員への嫌悪感、あるいは反感らしきものがあるように感じられよう。

こうした〈学校〉〈教育〉の形象は、どのような背景から生じてくるものなのか。本研究では、以上の問題意識に立ち、賢治童話における〈学校〉〈教師〉〈教育〉の問題について検討したいと考えた⁽⁵⁾。本来であれば、まずそれらのキーワードが表出する作品の全体像を提示したうえで課題を集約・整理し、次に個別の作品を検討していく手続きが必要である。が、今回はその前段階として、教育に対して批判的な作風を持つと思われる「鳥箱先生とフウねずみ」を中心としつつ、同作品が持つ問題を素描的に取り上げることで、この問題を考える手がかりとしたい。

二. 「鳥箱先生とフウねずみ」概要と研究

「鳥箱先生とフウねずみ」は、生前未発表の作品である。

あるうちにあつた鳥かご（鳥箱）は、〈天井と、底と、三方の壁とが、無暗に厚い板でできていて、正面丈けが、針がねの網でこさえた戸〉でできていた。ある日、人間により子どものひよどりがその中に入れられる。子どもがいやがってバタバタすると〈バタバタ云っちゃいかん〉。母の名を呼んで泣くと〈泣いちゃいかん〉。鳥箱はそう言ったことから〈急に、ははあおれは先生なんだな〉と気づく。ひよどりは、その後人間からエサをもらえず絶命。次に来たひよどりの子は腐った水で赤痢にかかり、その次は空や林が恋しくて胸がつまり、四番目は乱暴な猫大将につかまえられて、それぞれ死んでし

まう。

すっかり信用をなくした鳥箱先生は物置に移され、そこで出会った鼠から〈フウ〉というその子どもの教育を頼まれる。これを受諾した鳥箱先生は、フウが通るたびに呼び止めて、〈ちょろちょろ歩かない〉〈きよろきよろし〉ないなど訓示するが、フウはそのたびに虱や蜘蛛、けしつぶや稗つぶなどを引き合いに出して“自分が一番立派”と主張する。

怒った鳥箱先生はフウの母親に〈退校〉を言い渡す。そのとき猫大将がやってきて、フウを地面にたたきつける。そして、〈ハッハッハ、先生もだめだし、生徒も悪い。先生はいつでも、もっともらしいそばかり云っている。生徒は志がどうもけしつぶより小さい。これではもうとても国家の前途が思いやられる〉と述べて物語は終わる。

『新校本宮沢賢治全集』第八巻校異篇⁽⁶⁾によれば、使用原稿は「10-20 イーグル印原稿用紙(草色罫)」である。同全集十六巻(上)〈補遺・資料 草稿通観篇〉の《使用時期》⁽⁷⁾には、「草」と略称されるこの原稿用紙の執筆時期は、童話集『注文の多い料理店』刊行(大正十三年十二月)以前であり、また同じく「広」と略される草稿(「1020(広) イーグル印原稿紙」)以前とされている。「広」の使用時期は〈大正九年五月(「丹藤川」)～十年十一月(「図書館幻想」)〉と推定されていることから、「鳥箱先生とフウねずみ」は賢治が農学校教諭となる大正十年十二月には遅くとも成立していたことになる。ちなみに、続橋達雄は〈大正十年頃の執筆〉⁽⁸⁾と推定している。

草稿に付された表紙には、赤インクで〈寓話集中〉との書き込みがあり、他に「寓話」を冠するものに「寓話 洞熊学校を卒業した三人」「寓話 猫の事務所」、また「ツェ」ねずみ(表紙に〈動物寓話集中〉の書き込みあり)「ク」ねずみ(同様に〈寓話集中〉の書き込み)などがある。

賢治没後、まもなく刊行された文圃堂版『宮沢賢治全集』第三巻に収録されたのが公表された最初である⁽⁹⁾。研究上、どちらかといえば取り上げられることの少ない作品だが、近年賢治童話における「寓話」という視座から再評価の試みが行われている⁽¹⁰⁾。

天沢退二郎は〈本篇の寓意も最後の猫大将のセリフをみるまでもなく明瞭・普遍的であるが、細部の面白さは前後の二篇(引用者注-「ツェねずみ」「ク」ねずみ)のこと)ほどではない⁽¹¹⁾と、さほど高い評価を与えなかった。また、天沢は〈最初この鳥かご、というより鳥箱、に次々に入れられては死んでいったかわいそうな四羽のひよどりを別にすれば、このいいかげんな鳥箱先生、なさけないダメ生徒のフウねずみ、乱暴な猫大将と。この物語には肯定的登場人物はひとりもない〉〈これは本篇とともにねずみもの三部作を形成する「ツェねずみ」「ク」ねずみ〉についても同じことがいえる。この世の中はこんな連中ばかりだ。まったく《これではもうとても国家の前途が思いやられる》というセリフを、最後に、乱暴な殺戮者・猫大将の口から言わせているところに、賢治の精一杯の諧謔、笑いの苦さが感じられる。国家の前途、つまり昭和の暗黒は、おそらく本篇の書かれた大正十年代にもうはじまっていた⁽¹²⁾とも評した。

暗い時代の影響を指摘する声は他にもある。畑山博は〈鳥箱を殺りく箱のようにして、次々に純朴なヒヨドリを入れてゆく見えない巨きな手。それとその手先になって「国家、国家」と叫びながら生徒を死地に追いやる将軍。／賢治もまたあの時代の暗い軍靴の足音に耳をそばだてていた⁽¹³⁾と述べ、軍国主義へ傾斜していく動きを捉えつつ、鳥箱や猫大将の背後に存在し、すべての糸を操る〈見えない巨きな手〉に着眼した。

この〈見えない巨きな手〉の持ち主、すなわち〈人間〉がひよどりをたびたび殺しながらも、作品では一切批判されないとするのは大島丈志である。大島は、〈「鳥箱先生とフウねずみ」の世界では、どうすることもできない不条理をもたらす存在として人間がいて、その下に動物世界があるという、

二重の構造を持っている。つまり本作品は人間という絶対的存在によって生死を左右されることが肯定される動物世界の物語であるとする。ただ本作では〈不条理を加える存在が具体的に存在する人間であるという点で、人間存在の恐ろしさを風刺する作品となっている点に特徴がある〉⁽¹⁴⁾と解釈した。

このように、先行研究ではこれまで、忍び寄る暗い時代の足音を聞き、鳥箱、フウねずみ、猫大将、そして見えない人間の存在のありようから、寓意の内実を考えることに重点がおかれてきたといえる。

論者は、前に述べた通り、特に教育との接点から本作を考えてみたい。これまで、我が国における近代教育との関係から、鳥箱先生という教師・教員像に着眼したものは管見ではみられない。よって、鳥箱先生の教師像がいかにか造型されたか、当時の教育との絡みを視野において検討していく。

三. 近代教育における教職像と教員養成

さて、人間によって“手作り”されたであろう「鳥箱」は、どこか“にわか仕立て”を思わせる。鳥箱先生も〈急に〉先生になった、いわば“にわか先生”である。

我が国の教員養成の歴史は、師範学校が創設された明治五（一八七二）年に遡及する。

日本における教職像と役割の変化について検討した斉藤泰雄によると、戦前までの大まかな時代区分は以下の通りだという⁽¹⁵⁾。

1. 江戸時代の伝統的教師（江戸中期～幕末期）
2. 公立学校教員の出現（1872年学制以降）
3. 国民の啓蒙と近代化の担い手としての教員（明治前半期）
4. 教育勅語の教育理念の推進者としての教員（森文政～明治後期）
5. 「聖職」にして清貧に甘んずる末端官吏としての教員（日露戦争以降～大正期）
6. 独自の教授法の探求・開発（明治後半～大正自由教育期）
7. 軍国主義と国家主義への協力者としての教員（昭和前半期）

江戸期には、庶民に読み書きなどを教える寺子屋が都市部に加えて農村部にも広く普及していたことが知られているが、その教師について、石戸谷哲夫は次のように述べている。

私塾や寺子屋は、民衆の間から生活の必要に応じて自然発生したもので、公的に設置され民衆に押しつけられた機関ではない。強い機関でないから、人格実力に根ざす威信をもたない個人が師匠たることは、あり得なかった。お師匠さんは、神官僧侶医師庄屋など尊敬される職業を本務としたから、師匠職を必ずしも金銭的報酬の尺度で考えなかった。彼らは多く土着の人であった。土地の人たちとの関係は、打算的でなく、義理人情的であり、一次集团的親密さをもっていた。⁽¹⁶⁾

江戸期には、人格・実力・社会的地位ともに申し分のない人材が教師を務めたことから、まさに“師”と呼ぶに相応しい伝統的教師像であったわけである。

しかし、こうした教師像は、明治維新とともに大きく変貌を余儀なくされていく。維新とともに、〈近代国家の建設と共に近代学校が創設され、「師」をとりまく状況は一変した。新しい資質を有する教員が大量に必要とされ、これを計画的に養成しなければならない時代を迎えた〉⁽¹⁷⁾からである。

かくして、近代学校の教員は、〈寺子屋師匠のように誰でもが自由に開業できるものではなくなっ

た。その名称も、師匠から教員へと転換されることとなった⁽¹⁸⁾のである。

明治五年の学制以降、「教育令」(一二年)「同改正」(一三年)、「小学校令」「中学校令」「師範学校令」「帝国大学令」(以上、一九年)の公布を経て「教育勅語」(二三年)が發布され、明治二〇年代にはその屋台骨が形成される。そして明治三〇年頃からは、「小学校令」をはじめとする関係法令の改正や、「実業学校令」「高等女学校令」「専門学校令」の制定によって学校制度が次第に確立・整備されていく。日本の近代的な教育施策は、明治初期から骨格が形成され、一部改正を加えながら、明治末年から大正期にかけて定着するように構想されたのである。

一方、教員養成の流れはどうか。まず明治五年、東京に国直轄の師範学校が設立され、翌年から各大学区に官立の師範学校が設置されていく。各府県は、師範学校の卒業生等を招聘して教員養成機関を設置、一〇年頃から府県の師範学校が整備され、一三年には各府県に師範学校の設置が義務化、翌一四年には「師範学校教則大綱」により同校における教則が統一されることになる。

明治一九年、森有礼の「師範学校令」から「師範教育令」(同三〇年)と続き、教員養成の制度拡充がさらに注力され、これにより各道府県に師範学校、同女子部の一校または数校の設置をみ、全国的な普及を推し進めることとなった。

そして、就学率の上昇とともに小学校の教員数は増加し続け、明治六(一八七三)年当初、二万七一〇七人であったのが、三六(一九〇三)年には一〇万八三六〇人となり、大正一三(一九二四)年には二〇万人を超える規模となって、明治四〇年以降、急増していくことになる⁽¹⁹⁾。当時、多くの教員が求められたために、早急に養成しなければならない状況にあったのである。

このように、日本の近代的な教育施策の確立・整備、および教員養成の歴史は、明治初期にその萌芽が見られ、改定を加えながら確立されていき、大正期にかけて定着していく。そしてそれは、宮沢賢治が教育を受け、自らが教員となる時期とも重なっているのである。

四. 初等教員養成における批判の発生

ところで、戦前の初等教員養成の一端を担った師範学校が、明治三三(一九〇〇)年頃からさまざまな批判に晒されることはよく知られている。

唐沢富太郎は、「師範型」と呼ばれる師範学校の教員資質が形成されたことについて、森有礼文相の軍隊式教育にその原因があったことを述べたうえで、次のように批判する。

森以後の師範学校は極めて窮屈なものとなり、形式的なことにとらわれ、師範生を無暗に圧迫して生徒の反抗心を醸成するに至ったものであるが、このような師範学校の空気が、やがていわゆる師範タイプといわれるものを形づくって行く原因になっているものと言わなければならない。⁽²⁰⁾

観点は異なるものの、海後宗臣も「師範型」という教員養成制度が形成された要因をいくつか指摘している⁽²¹⁾。

水原克敏によれば、明治三三年頃に台頭しつつあった「師範型」批判は、四三年頃には一段と高まり、大正九年以降、〈好ましくない資質を有する教員として、低く評価される際に使用されるターム〉⁽²²⁾となり、昭和期に入ってさらに批判が拡大していくという。

こうした批判が出てくる背景には、何があったのか。批判が顕在化する明治三三(一九〇〇)年頃から大正九(一九二〇)年頃までの、教員養成にかかる主な経緯について、水原論文を参考に確認しておく。

この時期の特徴として、まず、就学率の急上昇があげられる。

明治三三年には、就学率八一・六七%、通学率五九・一五%であったのが、大正六年にはそれぞれ九八・七三、九二・三五%となっている⁽²³⁾。この期には、殆どの子どもが尋常小学校へ入学、通学ができるようになったのである。

また、義務教育の年限が四年から六年に変更（明治四〇年）されたにも関わらず、進級者が増加した（高等小学校在籍児童数の増加は、小学校教員により高い教育能力を要求した）ことに加え、明治四三年から使用された第二期国定教科書の内容の高度化も指摘できる。第二期は、第一学年算数の場合、第一期と比較すると分量で約一・六倍、第四学年では二倍になり、教授内容もより高度になったという。国語も同様で、歴史的仮名遣いが付加されるとともに、配当漢字が従来四年生までで五〇〇字、高等科を加えても八五〇字であったのが、一三六〇字に大幅に増加した。

つまり、この時期、近代的教科内容のカリキュラムへと大きく舵を切る期に入ったことになる。そのなかで、高度な教科内容に対応できる、より高い教授能力が求められることになったのである。

以上をふまえて、水原は次のように結論づけている。

1900年から1920年の過程は、資本主義の発達を背景に、就学率が急上昇し、小学校生徒数の増加、教員数の増加、あるいは進学者数の増加、中等学校の拡大など新しい状況が展開し、小学校教員としての資質形成において、次のような不都合な事態が進行していたからである。重要な変化を项目的に指摘するなら、

- (1) 小学校教員をますます大量に養成しなければならない段階にはいつていた。
- (2) 他の中等学校の発達によって、師範学校はエリートコースとしての座から転落し、傍系としての制度的位置に定着した。
- (3) 反面、師範学校は小学校教員養成の学校として、その制度的役割が実態として明確になった。
- (4) その結果、師範生の人材の質の低下、
- (5) 師範生のコンプレックス形成などの事態が生じていた。

つまり、(1)と(3)では、小学校教員を大量に養成しなければならない師範学校の役割の明確化が進行していたにもかかわらず、それが進行すればするほど、(2) エリートからの転落、(4) 人材の質の低下、(5) コンプレックスの形成という、師範生の小学校教員としての資質形成にとって、不都合な事態が進行し始めていたと捉えられる⁽²⁴⁾。

このように、明治末から大正後期に至って、大量の教員養成とともに教授内容が高度化し、そのプロセスにおいて、資質・能力の低い教員への社会的批判が次第に高まり、拡大していくこととなったのである。

五. 教員批判と「鳥箱先生とフウねずみ」

本作「鳥箱先生とフウねずみ」が執筆された大正一〇年前後は、まさにこの教員批判が展開され、社会が教員に対して厳しい目を向けていく時期と重なっている。先の水原論文では、当時の師範学校では騒動やストライキが頻出し、〈破綻と混迷に陥っていった〉⁽²⁵⁾ことが示されている。加えて、騒動は単なる数校の動向なのではなく、地方を含めた全国的なものであったという。大正末年には、師範学校生の弛緩、また学校そのものの指導力の低下が顕在化していたのである。

このような視点で見ると、本作にも時代の影響を感じずにはいられない。

鳥箱先生は、〈天井と、底と、三方の壁とが、無暗に厚い板でできていて、正面丈けが、針がねの網でこさえた戸〉でできており、〈小さなガラスの窓が横の方につい〉た、〈せまい、くらい〉存在である。生徒を閉じ込める存在としての鳥箱（教室）であり、教員であるが、これは教育する場（教室）や教員が、軍隊式教育によって〈極めて窮屈なものとなり、形式的なことにとらわれ、師範生を無暗に圧迫して生徒の反抗心を醸成するに至った〉⁽²⁶⁾ という教員養成を暗示しているのではないか。フウへの訓示も〈もう少しりっぱにやって貰いたい〉というのが主旨で内容に一貫性はなく、あくまで形式的であったことも重ってくる。なお、先生はひよどりに〈お前を教育する〉とは言ったものの、何かを教えたり訓示したりした形跡はない。あくまで形式的な教員なのである。

一方、生徒のひよどりは〈先生を大嫌いでした。毎日、じっと先生の腹の中に居るのでしたが、もう、それを見るのもいやでしたから、いつも目をつぶってゐました。目をつぶっても、もしか、ひよっとすると、先生のことを考へたら、もうむねが悪くなるのでした〉と、先生に嫌悪という感情しか抱いていない。せまく暗い鳥箱（鳥かご）と野生の鳥の相性がよいわけではなく、先生と呼べと強制されることにも反感を抱いているのである。

賢治は盛岡中学時代（四年生時）、寄宿舎での舎監排斥運動に関わり、退寮処分となったことがある。これは新しく着任した舎監に嫌がらせをしたもので、〈賢治は首謀者の一人で、舎監にたびたび議論を吹きかけたと言われているが、事件の真相は不明〉⁽²⁷⁾ という。中学生という思春期特有の、若かりし頃の行動ともとれるが、教員というだけで権威的であろうとしたことに対する一種の反発、不満が賢治にはあったのではないか。こうした自体験が教員への厳しい視線になっていることもあろう。

作品では、物語の多くは物置へ追いやられてからの部分に費やされており、そこはフウの教育に関わる場所である。

鳥箱先生は、まず出会ったフウを見て〈ははあ、仲々賢こさうなお子さんですな。頭のかたちが大へんよろしい〉と母親ねずみに言う。生徒を「見ため」で判断し、〈頭のかたち〉を他と比べていることになる⁽²⁸⁾。

作品「葡萄水」には、〈コンネテクカット大学校を、最優等で卒業しながら、まだこんなこと私は云ってゐるのですよ。みなさん、私がいけなかったのです。宝石は宝石です。青い葡萄は青い葡萄です。それをくらべたりなんかして全く私がいけないのです。実際コンネテクカット大学校で、私の習ってきたことは、「お前はきよろきよろ、自分と人とをばかりくらべてばかりみてはならん。」といふことだけです〉という箇所がある。また童話集『イーハトヴ童話 注文の多い料理店』出版に際して作られた新刊案内には、「どんぐりと山猫」の紹介として〈山猫拝と書いたおかしな葉書が来たので、こどもが山の風の中へ出かけて行くはなし。必ず比較をされなければならないいまの学童たちの内奥からの反響です〉⁽²⁹⁾ とある。自らの作品において、教育における比較を戒めていた賢治だが、鳥箱先生の教育には〈つまらないものと自分をくらべ〉ず、〈もっと立派なものとかくらべ〉よという、やはり他者との比較の物差しがある。

結末における猫大将のことば〈もっともらしいうそ〉が意味するのは、鳥箱先生の、比較することを正当化する言説にあるのではないかとと思われる。

場当たりに先生となった鳥箱は、形式的な借り物の徳目を訓示するだけで、生徒の死に対しても〈哀れなことだ〉とまるで他人事で、たえず自らの教育の正当性を主張するのみである。生徒のフウねずみも志小さく、何か言われるといつも穴の中に逃げ込む（親の庇護にすがる）存在であり、自分より小さなものを持ち出しては自らを正当化する。〈国家の前途〉を嘆く猫大将も自らの欲望のために登場する極めて利己的な存在であり、欲望を覆い隠すために国家を持ち出してやはり自分を正当化する。

物語は、こうした者たちが展開する、いずれも愚かな正当性の競い合いの構図であり、この愚かな競い合いに本作の寓意の一端があるといえる。

そこには、賢治自身の教員に対する鬱屈した思いや、当時の社会において醸成され一般化していた、教員に対する批判が込められていると言えるのではないだろうか。

六. おわりに

賢治が描く学校・教室は、批判や反感だけに占められているのではない。生き生きと子どもが躍動する場でもあり、非日常のことが起こりうる場であり、本当の学問を行う場、そして理想を実現しようとする場でもある。近代的な教育を担う場に身を置いたものとして、賢治自身がモデルであろうと想定される作品も多くあるが、その反面、嫌悪や憎悪に近い学校観・教員観も見えてくる。その背景の一つとして、当時の近代教育、とりわけ教師教育に対する社会的批判の存在や、加えて賢治自らが持つ都会中心の教育への不満、不振があったのではないかと思われる。

作品「十月の末」には、嘉ッコの兄が、鞆から読本（教科書）を出して音読するという興味深いシーンがある。兄が読んだ農村の年越し風景（母が手ぎわのだいこんなます／これがいなかのとしこしぎかな）に対し、祖父は異を唱え、父は祖父の言葉を笑いながら共感しつつも、読本の思惑を推察、しかし当の兄は気分を害す。それぞれ受けた教育が異なる世代によって受け止め方が異なるわけだが、この作品について、安藤恭子は〈〈近代〉に虐げられながら〈近代〉に浸食され、構造変革を余儀なくされていく地方の姿〉⁽³⁰⁾を見ている。国による、都会中心の教科書という教育装置を通して、地方はその実態とはかけ離れた中央に都合のよい存在になるよう強制されたともいえる。ここに、賢治によって〈都会文明と放恣な階級とに対するやむにやまれない反感〉⁽³¹⁾が表れてくる一因がみえてくる。

賢治が自らの授業において、教科書を使用せず、その理由として〈教科書の内容は東京中心だから、稗貫地方にはあわない〉⁽³²⁾と述べたのはよく知られている。イーハトヴをこよなく愛し、〈本当の勉強〉を追い求めた賢治だが、苦しい地方農民の姿をかえりみることなく、都合のよい論理で搾取されていく状況に我慢ならなかったのであろう。

なお、今後は教育関係の形象を賢治作品の全体に広げ、事例を網羅的に抽出するとともに、さらに精緻な分析を行っていきたい。

注

- (1) 作品本文の引用は、すべて筑摩書房刊『新校本宮沢賢治全集』（全一六巻）に拠った。
- (2) 主なものとして、「イーハトーボ農学校の春」「イギリス海岸」「台川」「〔或る農学生の日誌〕」「フランドン農学校の豚」「サガレンと八月」などがある。
- (3) 昭和五年四月四日付、沢里武治宛書簡二六〇（『新校本宮沢賢治全集』第十五巻、筑摩書房、一九九五年一月二十二日）二八一頁。
- (4) 中地文「〔寓話 洞熊学校を卒業した三人〕」（『宮沢賢治の全童話を読む』国文学解釈と教材の研究 二月臨時増刊号、第四八巻三号、學燈社、平成一五年二月一〇日）には、賢治が〈言葉遣い正しく謹厳な教師像を描いている〉との指摘がある。
- (5) 賢治作品と学校・教室の風景を論じているものに、山本昭彦「教室の風景—賢治と学校」（『アルテス リベラレス』第七八号、岩手大学人文社会科学部紀要、二〇〇六年六月二〇日）がある。同論文では、賢治の学校への思いを作品の中に探り、そこに賢治の使命感や葛藤をみている。こうした先行研究にも学びながら、本稿では特に教員養成という観点から賢治作品を見ていくことを主眼とする。
- (6) 『新校本宮沢賢治全集』第八巻校異篇（筑摩書房、一九九五年五月二五日）

- (7) 『新校本宮沢賢治全集』第十六卷(上)〈補遺・資料 草稿通観篇〉(筑摩書房、一九九九年四月二五日)一〇～十二頁。
- (8) 続橋達雄「宮沢賢治の生前未発表童話考(二)」(『野州国文学』第六五号、國學院大學栃木短期大学国文学会、平成十二年三月十五日)七四頁。
- (9) 『宮沢賢治全集』第三卷「作品」(文圃堂、昭和九年十月二十五日)の三八七～三九三頁に掲載。本文は、用字などを除き『新校本宮沢賢治全集』と大きな異同はない。なお、掲載頁末尾に、(大正十二年?作)との記述がある。
- (10) 大島丈志「『鳥箱先生とフウねずみ』における不条理の構造」(『宮沢賢治の農業と文学』蒼丘書林、二〇一三年六月二〇日)
- (11) 天沢退二郎「解説」(『新修宮沢賢治全集』第八卷、筑摩書房、一九七九年五月一五日)三三三頁。
- (12) 天沢退二郎「収録作品について」(新潮文庫版『ポラーノの広場』解説、平成七年二月一日)五二六～五二七頁。
- (13) 畑山博『宮沢賢治幻想辞典 全創作鑑賞』(六興出版、一九九〇年一〇月五日)二八〇頁。
- (14) 注 10 に同じ。二八〇頁。
- (15) 斉藤泰雄「近代的教職像の確立と変遷——日本の経験」(『国際教育協力論集』第一七卷第一号、二〇一四年十月三一日、広島大学教育開発国際協力研究センター)一七頁。なお、引用にあたり、項目番号を付与した。
- (16) 石戸谷哲夫『日本教員史研究』(講談社、一九六七年一月二〇日)四〇～四一頁
- (17) 水原克敏『近代日本教員養成史研究 —教育者精神主義の確立過程—』(風間書房、平成二年一月三一日)四頁。
- (18) 注 15 に同じ。一八頁。
- (19) 文部科学省『学制百年史』資料編 教育統計「第 28 表 設置者別 学校種別 教員数」参照。
- (20) 唐沢富太郎『教師の歴史 教師の生活と倫理』(創文社、一九五五年六月十五日)五五頁。
- (21) 海後宗臣編『戦後日本の教育改革 8 教員養成』(東京大学出版会、一九七一年九月三〇日)八～一〇頁。
- (22) 水原克敏「『師範型』問題発生時の分析と考察—師範教育の小学校教員資質形成における破綻—」(『日本の教育史学』二〇巻、教育史学会機関誌編集委員会編、一九七七年一〇月五日)二二頁。
- (23) 数字は注 22 の水原論文から引用させていただいた。二三頁。
- (24) 注 22 に同じ。
- (25) 注 22 に同じ。二六頁。
- (26) 注 20 に同じ。
- (27) 渡部芳紀編『宮沢賢治大事典』(勉誠出版、平成一九年八月一〇日)三八六頁。牧野立雄の執筆。
- (28) 『新校本宮沢賢治全集』第八卷校異篇によると、作品では鳥箱先生がフウの母親に〈きっと教へてあげますから〉と言ったあとに改行して以下があったという(その後抹消)。
- そこで、フウねずみは、すっかり鳥箱先生の弟子になりました。弟子にはなりませんが、どうでせう、みなさん。フウねずみを、鳥箱先生がうまく教へることができるでせうか。私は、もう、きっと出来ないと思ひます。なぜなら、さっき、鳥箱先生が、フウ鼠を、たいへん賢こさうなお子さんですな、頭の形が大へんよろしい、と云ったでせう。あれがそもそも、非常なまちがひです。フウねずみにはそれはそれは悪い癖があつて、おまけに頭のとっぺんは、お椀のやうにひっこんでゐたのです。あんな形がいゝ形だなんて、鳥箱先生のほかに誰も云ふ氣づかひはありません。／さあどうなるかしらべて見ませう。
- これを見る限り、語りの露出とともに、鳥箱先生への批判、とりわけ頭の形で価値判断することへの批判が垣間見える。ここは「どんぐりと山猫」のどんぐり裁判で展開される部分にも通じるものがあると思われる。
- (29) 童話集『イーハトヴ童話 注文の多い料理店』(大正一三年一二月)新刊案内。『新校本宮沢賢治全集』第十二巻校異篇(筑摩書房、一九九五年十一月二五日)一二頁。
- (30) 安藤恭子「宮沢賢治『十月の末』論 —浸食される〈地方〉—」(『日本文学』四一卷三号、日本文学協会、一九九二年三月一〇日)六〇～七〇頁。
- (31) 注 29 に同じ。一一頁。
- (32) 佐藤成『証言 宮沢賢治先生』(農山漁村文化協会、一九九二年七月一日)八三頁。